

# Lib.

京都産業大学図書館報

Vol. 40, 増刊号 (Dec. 18, 2013)



## 発表!

第9回

京都産業大学図書館書評大賞


|           |       |
|-----------|-------|
| 入賞者発表     | 2     |
| 選考結果と全体講評 | 3     |
| 入賞作品および講評 |       |
| <大賞>      | 4-5   |
| <優秀賞>     | 6-11  |
| <佳作>      | 12-21 |
| アンケート     | 22    |
| 統計        | 23    |
| 概要        | 24    |



# 入賞者発表

第9回京都産業大学図書館書評大賞には151篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。


各賞ごと氏名の50音順



| 大賞                  |                          |  |
|---------------------|--------------------------|--|
| 氏名                  | 所属・年次                    | 書評タイトル<br>『書評対象図書』（著者名等）   |
| ひろた<br>廣田 はるな<br>暖奈 | 総合生命科学部 動物生命医科学科<br>4年次生 | 細胞の持ち主にも人生があったことを忘れてしまわないために<br>『不死細胞ヒーラ：ヘンリエッタ・ラックスの永遠（とわ）なる人生』（レベッカ・スクルト著；中里京子訳） |



| 優秀賞                  |                          |                                       |
|----------------------|--------------------------|---------------------------------------|
| 氏名                   | 所属・年次                    | 書評タイトル<br>『書評対象図書』（著者名等）              |
| あまの<br>天野 るみ<br>瑠美   | 総合生命科学部 生命資源環境学科<br>4年次生 | 時代を越えた邂逅<br>『海底二万里』（ジュール・ヴェルヌ著；村松潔訳）  |
| すがぬま<br>菅沼 ゆうた<br>祐太 | 文化学部 国際文化学科<br>2年次生      | 三度目で最後の大陸<br>『停電の夜に』（ジュンパ・ラヒリ著；小川高義訳） |
| やまと<br>大和 まい<br>舞    | 法学部 法律学科<br>3年次生         | 西の魔女からの教え<br>『西の魔女が死んだ』（梨木香歩著）        |



| 佳作                    |                     |  |
|-----------------------|---------------------|--|
| 氏名                    | 所属・年次               | 書評タイトル<br>『書評対象図書』（著者名等）                                 |
| おぼた<br>小幡 ちひろ<br>千紘   | 文化学部 国際文化学科<br>2年次生 | 恍惚の人<br>『恍惚の人』（有吉佐和子著）                                   |
| しまだ<br>島田 あやか<br>紋佳   | 法学部 法律学科<br>3年次生    | 片親疎外という児童虐待<br>『離婚毒：片親疎外という児童虐待』（リチャード A. ウォーシャック著；青木聡訳） |
| すずき<br>鈴木 あんな<br>杏那   | 理学部 物理科学科<br>3年次生   | 生命について考えて自分を知る<br>『世界をやりなおしても生命は生まれるか?』（長沼毅著）            |
| てはら<br>手原 ひろか<br>啓花   | 法学部 法政策学科<br>3年次生   | 「かっこの親 もずの子ども」を読んで<br>『かっこの親もずの子ども』（椰月美智子著）              |
| やまぐち<br>山口 ふみたか<br>文崇 | 経営学部 経営学科<br>3年次生   | 2人のリーダーと軍隊という組織<br>『八甲田山死の彷徨』（新田次郎著）                     |

## 選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 小林 武

慌ただしい時代である。実に慌ただしい。時間に追いまくられ、速すぎる環境の変化についていこうと、毎日必死な思いである。こんな時、本が読みたいという気持ちが生まれる。自分を距離をとって見つめたいと思うのである。読書が知識の源であることは、言うまでもない。知るために読むのである。しかし、慌ただしい時間を止めて足下を見つめるきっかけも、読書から得られる。それには書評がよい。書物と対話しよう。図書館書評大賞は、この願いから設けられた。応募アンケートには、「人によって受け取り方が違うこと、これが読書の深みである」「達成感がある」等々、多くの感想が寄せられた。書評大賞は、書くスキルの向上や自分との対話の場となっているのである。

書評大賞は、今回で9回目を迎える。本年度は、初めての取り組みとして「文章力 up 実践講座」を6月26日（水）に開き、本学講師の藤原義則氏に引用の仕方や文章を書くコツについて実践的に指導して頂いた。55名の参加があり、文章を書くことへの関心の高さを窺わせた。そして、7月3日（水）には直木賞作家の村山由佳氏をお招きして、書評大賞講演会を開いた。村山氏は「別れが教えてくれること」をテーマとして、別れから得たものや苦しみが創作の泉になっていることなどを話された。講演終了後の質疑応答も実に活発であり、学外からの聴講者も含めて、参加者は114名であった。

書評大賞は7月1日（月）に募集を始め、9月18日（水）に締め切った。重複応募（同一内容の応募）を除いた実応募数は151篇（126名）で、昨年度に比べて実応募数で45篇、約1.4倍に増えた。選考は、文字数（1600～2000字）などの応募要件を満たさないものを除外し、第1次選考の対象として残ったのは、145篇である。

第1次選考は書評大賞選考委員会の委員（図書館委員と図書館事務職員）が2名1組となり、10名5組がそれぞれ3段階で評価した。その結果、26篇を第2次選考に残した。第2次選考は、11名の書評大賞選考委員が日本語の体裁、内容の要約、批評する力を基準に審査して、入賞作9篇を選んだ。

大賞は総合生命科学部4年の廣田暖奈さんで、レベッカ・スクルート著『不死細胞ヒーラ：ヘンリエッタ・ラックスの永遠（とわ）なる人生』の書評である。ヒーラ細胞とは、世界で初めて体外で生き続け、科学研究に貢献した細胞だが、本書はそれを提供した黒人女性ヘンリエッタの伝記である。廣田さんは本書を通して、科学と倫理、権利やプライバシーなど、進歩の著しい科学研究に潜む問題を見いだした。優秀賞は、総合生命科学部4年天野瑠美さんのジュール・ヴェルヌ著『海底二万里』、文化学部2年菅沼祐太さんのジュンパ・ラヒリ著『停電の夜に』、法学部3年大和舞さんの梨木香歩著『西の魔女が死んだ』を対象とした書評の3篇である。いずれも作品を介して自分を掘り下げたり、巧みに紹介や批評をして、読書へと誘う佳篇である。

例年、文学領域の書評が多いのであるが、今回の傾向としては、自然科学や技術・工学領域のものが増え、2年次生の応募も増えたことが特筆される。また複数回の応募ということも注意を引く。天野さんはこれまでに2回入賞していたが、今回、優秀賞に輝いた。経営学部3年山口文崇さんも昨年応募し、今回入賞している。継続することの大切さが分かる。

今回の書評大賞が以前より応募数が増えたのは、学生諸君の関心の高さがあってのことだが、先生方がゼミなどを通して勧めてくださった影響も大きい。そして何よりも滞りなく審査が行われたのは、ご多忙にもかかわらず選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方と図書館事務職員の方のご尽力のお陰である。ここに記して感謝を申し上げたい。

最後になったが、丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社雄松堂書店・京都産業大学同窓会からご協賛をいただいた。あらためて厚くお礼を申し上げたい。

第9回 京都産業大学図書館書評大賞

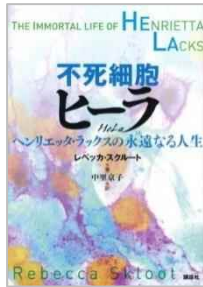


大賞

総合生命科学部 4年次生

ひろた はるな

廣田 暖奈



書名：『不死細胞ヒーラ：ヘンリエッタ・ラックスの永遠(とわ)なる人生』

著者：レベッカ・スクルート著；中里京子訳  
出版社・出版年：講談社，2011

### 「細胞の持ち主にも人生があったことを忘れてしまわないために」

ヒーラ（HeLa）細胞をご存知だろうか？ 最近話題になった iPS 細胞はいざ知らず、生物学を専攻する学生や専門家でもない限り、その名を目にする機会はほとんどないだろう。

「HeLa」とは、ヘンリエッタ・ラックス（Henrietta Lacks）の名から頭文字二つをとった標識名である。1951年に子宮頸癌を患っていた黒人女性ヘンリエッタから採取された癌細胞に由来し、世界初の、不死化に成功したヒト細胞である。それまで、人の細胞を生きたまま培養することは技術的に非常に難しかったが、ヘンリエッタの細胞は、通常ではあり得ないほどの強靱さをもって、体外で生き続けた。科学・医学界は、この細胞を用いて癌のメカニズムを解明し、ポリオワクチンや HIV の研究以外にも、およそ人には実施できないようなあらゆる実験を行った。幹細胞の単離やクローン動物の作製、体外受精の技術もヒーラ細胞の貢献によるものである。

しかしながら、その出生は長い間謎に包まれていた。80年代後半、大学の授業でヒーラ細胞に出会った著者は、そこでヘンリエッタの名を知るが、彼女の背景がほとんど不明なことに興味を抱いた。「これほど科学に重要な貢献をしたのに、本人について書かれたものが何もない」のはなぜか、と。それは、細胞ハンドブック上の「ヒト女性由来細胞」の文字に心ひかれた私と同じだった。

本書は、10年あまりの取材期間を経て出版された、ヒーラ細胞とその持ち主ヘンリエッタの伝記である。ヒーラ細胞の樹立から始まる細胞培養の歴史を追いながら、細胞などの臨床材料における倫理的問題、ドナーに対する告知と同意の必要性、発展する科学への規制のあり方を問いかける。そして、半世紀に渡り、金銭的利益や情報の面で差別され続けた、ヘンリエッタの家族の苦悩や葛藤を描きだした。著者は、生物科学を学んだ作家であり、専門用語の解説は丁寧で分かりやすい。丹念な取材に裏打ちされた内容は、信用に値するだろう。最も協力的だったヘンリエッタの末娘デボラとのやりとり以外では、なるべく感情的な文章を抑え、事実を書くことで、読者に冷静に考えてもらおうとする姿勢がみえる。

注目したいのは、ラックス一家にはヒーラ細胞に関する権利が一つもない点である。現在、ヒーラ細胞は全世界で売買されているが、その収益や特許はすべて、細胞バンクや多数のバイオテクノロジー社が手にしている。ヘンリエッタの家族は、健康保険さえまかなえないほどの貧しさの中にいる。さらに、著者が取材を行う90年代まで、本人たちには満足に情報がもたらされず、十分な説明もされていない状態だった。当のヘンリエッタでさえ、自分の細胞が研究室で培養されていることなど知らずに亡くなっている。

なぜ、このような状況に陥ったのか。実は、50年代から今に至っても、組織研究の法とドナーの保護措置は存在しないのである。法律では、一度体から離れた組織は廃棄物とみなされ、組織の持ち主の権利は消失するという。科学者は、ドナーが組織の所有権を主張することで、科学の進歩が妨げられるのではないかと危惧している。インフォームド・コンセントの実施にも法的拘束性はない。著者もあとがきで言及しているが、組織標本への法的規制が存在しない以上、ドナー側が後手にまわる可能性は十分にあり得る。そうならないためには、ドナーが情報の面で誰よりも先手を打つ必要があるが、医師や専門家の助けなしでは限界がある。そうであれば、関係者が、法的な強制がなくとも情報を開示し、説明する義務を負うことで、妥協点を探ることが現実的ではないだろうか。良心による判断を下すのなら、科学研究者への倫理教育に力を入れる必要があるだろう。

読者は、ヒーラ細胞の真相を知っていくうちに、もし自分や家族がラックス一家の立場であったとしたらどうするだろうと、考えずにはいられない。さらに、本書は、細胞を物として扱っていた私のような人間に、その背後にあるかもしれない犠牲を忘れてしまうことの無関心さを指摘する。

現在では、細胞内にDNAが存在し、その遺伝情報が潜在的プライバシーであることは明白なため、この先、ヒーラ細胞のような有益な研究素材が発見されても、それと個人とを結びつける行為は禁止される。つまり、本書のように、細胞の持ち主について書かれたものが何もない状態から、著者や私が抱いた好奇心を満たすために、取材や出版を行うなどする行為は、すでに世間に露出が多かったヒーラ細胞だったからこそ可能であったといえる。プライバシー保護の観点からも、本書から学び取れるものは多い。

もはや、実行可能な法的手段を持たないヘンリエッタの家族の望みは、人々に、ヘンリエッタのことを正しく知ってもらうことにある。

ヒーラ細胞の恩恵を受けているだろうすべての人に、本書を読んでほしい。

### 選考委員による講評

### 選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 岡田 憲志

「不死細胞ヒーラ」タイトルからはSFめいた作品を想像させるが、評者は最初にヒーラという単語の語源と不死細胞が癌の原因究明や新薬開発などバイオテックの発展に不可欠な発見であったことを述べ、このヒーラ細胞の輝かしい成果には、実はドナーの個人情報、同意、所有権、利益配分、人種差別など専門的で複雑な問題点が多い事を、核心を突いた判り易い言葉でまとめている。この構成と要約に対して多くの選考委員は高い評価を与えた。

「一度体から離れた組織は単なる廃棄物であり、その利用で得られる利益に関し元の所有者には何の権利も無い」を起点とするこれらの問題の解決には、法的な整備だけではなく、評者は自分自身への反省もこめて「人を扱っているのだ」との意識が大切であると意見を述べると同時に、ヒーラ細胞に関与する仲間にもこの本を読むことを薦めて締めくくったのは良かった。

遺伝子操作、iPS細胞による再生医療が現実化した今、情報が瞬時に広がるネット社会で、遺伝子の特許、細胞の所有権、個人情報を含むDNAの取扱いの問題に対処する多くのヒントを含んだ本である。

余談だが、上の言葉と「原発の爆発で放出された放射能と汚染物の所有権は東電にはなく、それが付着した土地の住民にある」は似ていないだろうか。

### 入賞者から一言



この度は、大賞に選出していただき、誠にありがとうございます。私が書く文章はかたくなりがちなので、自分で書いたものを人に見せるのは全く好きではないのですが、今回は「この本を紹介したい」という思いが強く、勇気を出して、応募しました。結果として、このように評価していただいたことは、今後文章を書いていく上での励みとなります。



第9回 京都産業大学図書館書評大賞



総合生命科学部 4年次生

あまの るみ  
天野 瑠美



書名：『海底二万里』

著者：ジュール・ヴェルヌ著；村松潔訳

出版社・出版年：新潮社，2012

### 「時代を越えた邂逅」

宇宙や地底、未開の極地……。古くより人々は未知の世界に想いを馳せてきた。中でも深海は海という身近なものでありながら、その深みに近づくことはなかなか叶わなかった。過去の人々は深海に夢を抱き、時にはその得体の知れなさに恐れ<sup>おの</sup>戦くこともあっただろう。人類が初めて潜水艇で潜航したのは1620年のことだったといわれている。

そして時は流れ、現代。

「モビリス！」

某人気テーマパークのとあるエリアでスタッフにこう言うと、スタッフは「モビリ！」と返してくれる。挨拶や合言葉のようなものだ。そのエリアにあるアトラクションの1つは「海底2万マイル」と名付けられ、小型潜水艇に乗り込んで海底探査に赴く内容となっている。このアトラクションは映画としても知られており、それらの原作がジュール・ヴェルヌの『海底二万里』だ。

1866年、海上で船を次々と沈没させてしまう謎の巨大生物が現れた。調査のために海へ出た博物学者のアロナクス教授は、使用人のコンセイユ、鉾打ちのネッド・ランドと共に、巨大生物の正体である潜水艦ノーチラス号に乗り込み、謎の人物、ネモ船長の下で海底を旅することになる。これは、そのノーチラス号での冒険をアロナクス教授視点で描いた、本来ならば青少年向けの空想科学小説だ。

なぜ敢えて「本来ならば」と述べたか。それは、今となってはこの作品は立派な古典小説、あるいは学術的資料でもあると考えたからだ。

時は19世紀。海を渡る手段としては石炭を燃料とした蒸気船が主流の時代に、電気を動力として驚異的なスピードで進む1隻の潜水艦。陸地同然に自由に往来できる海底散歩。海藻の草原。頭上を飛び交う魚たち。作中の言葉を借りるのであれば、まさに「筆舌に尽くしがたい」感動を人々に与えたことは想像に難くない。子どもだけでなく大人までも夢中にさせてしまったヴェルヌの想像力と知識、科学的根拠に基づいたストーリー構成は、まさに「SFの父」と呼ばれるに相応しい。

一方で学術的資料としての魅力だが、この作品が19世紀の自然科学の知見の粋を集めたものであり、当時の人々の科学に対する考え方をまざまざと見てとれるところにある。例えば、主人公のアロナクス教授が専門とする博物学だが、この学問は世に散りばめられた神の作品（生き物）を収集・分類することを根底としている。それ故に作中では「創造主」という言葉が多用されており、現代の科学者たちとの思考の相違を確認できる。また、これは私が個人的に衝

撃を受けたのだが、オオサンショウウオが海に生息しているシーンがある。このような、現代では間違っているとされる過去のリアルな科学的見解は教科書による学習では到底得ることができないだろうし、このような視点で作品を読むのもまた一興だろう。

さて、ここでネモ船長について少し触れておきたい。冒頭で紹介した「モビリス」「モビリ」という言葉は、作中では「MOBILIS IN MOBILE」という形で登場しており、これをアロナクス教授は「動くもののなかにある動くもの」と訳して「動くもの（海）のなかにある動くもの（潜水艦）、ノーチラス号にぴったりだ」という旨を述べている。しかしながら、私は、この言葉は単にノーチラス号のみを表しているのではなく、ネモ船長自身をも表しているような気がしてならない。陸での生活を捨てて海底を巡り、世間から乖離しても、動くもの（時代）のなかで確固たる信念を持って動くもの（者）。「ネモ船長とはどのような人物か？」と問われれば、この表現で事足りるだろう。本書の翻訳者である村松潔氏は下巻のあとがきにおいてアロナクス教授とコンセイユ、ネッド・ランドのことを「三人の主人公」と呼んでいるが、私はネモ船長も主人公の1人であると考えている。誰を主人公とするかは読み手によって異なるだろうが、アロナクス教授の知的好奇心、コンセイユの忠誠心、否が応でも陸に帰りたいネッド・ランドの怒り、ネモ船長の秘めたる想い……登場人物それぞれに視点を変えて何度も読み返すのも面白い。

2013年、19世紀とは打って変わって、今や私たち人類は水深7,000m（有人では6,500m）まで探査できるようになった。技術の発達により、ノーチラス号の見た景色はあり得ないと、いつか夢が覚めてしまう日が来るかもしれない。しかし、ヴェルヌが、ノーチラス号が、ネモ船長が私たちに夢とロマンを与えてくれたことは紛れもない現実であり、現に今も、映画、そしてアトラクションと、時代に応じて形を変えながら彼らは人々を魅了し続けている。映画やアトラクションのような近代的な楽しみ方も良いが、ストーリーを知っている人は今一度、知らない人はこの機会に、ぜひ原作を手にとってみてほしい。彼らはきっと、新たな成功と発見をもたらしてくれるはずだ。

### 選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 三輪 卓己

この書評は19世紀に書かれたスケールの大きな空想科学小説を扱った意欲作である。評者の生き生きとした文章やダイナミックな構成は、巨大な潜水艦で深海を探索するという物語に合致したもので、その魅力を十分に伝えている。しかし、この書評の価値はそれだけに留まらない。急速な科学技術の発展に沸いた19世紀の西欧に思いをはせることによって、この書の歴史的価値を指摘している。当時の人々が科学技術にどれだけ多くの期待をし、夢を見ていたか、さらには当時の科学が深海や生命にどこまで迫っていたか、この書はそうしたことを後世のわれわれに教えてくれるものでもある。また評者が主人公と思しき3人の人物ではなく、ネモ船長に注目している点も興味深い。こうした評者のユニークな視点が、この書評の面白さの源泉なのではないかと思う。

### 入賞者から一言



大学生活最後の年度に自分の一番好きな小説の書評で優秀賞という誉れある賞を受賞することができ、たいへん嬉しく思います。

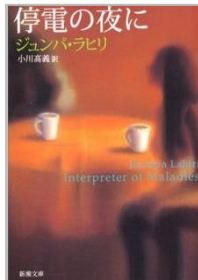
ご多忙の中、作品を評価して下さった選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

第9回 京都産業大学図書館書評大賞



文化学部 2年次生

すがぬま ゆうた  
菅沼 祐太



書名：『停電の夜に』

著者：ジュンパ・ラヒリ著；小川高義訳

出版社・出版年：新潮社，2003

### 「三度目で最後の大陸」

『停電の夜に』は、それぞれが独立した九つの短編からなる作品である。作者のジュンパ・ラヒリの両親はカルカッタ出身のベンガル人だが、彼女自身はロンドン生まれで、幼少時に渡米してアメリカで育つという経歴を持つ。短編の最後を飾る「三度目で最後の大陸」では、何気ない日常における、他人に対する思いやりや、リアルな人間関係が、彼女の視点から淡々と描かれており、そこには執着や未練のようなものはないように思われる。物語の中で、反復される高齢の大家の女性の台詞や所作には鬱陶しさを感じるのだが、少し距離ができて、いざ見かけなくなると不思議な寂しさを感じる。失ってからそのことの大切さや大きさに気付くことはよくあるが、何かに解放された喜びよりも、そこに空いてしまったスペースの方が大きく感じてしまうからなのだろう。私は、これまでロサンゼルス、グアム、ニューヨークとアメリカの全く異なる地域へ行ったが、そこで共通して感じたのは人間関係の程よいドライさであった。人付き合いがあまり得意ではない私にはこの距離感が心地よく、すぐに受け入れることができた。しかし、単調に繰り返される生活、一見ドライな人間関係の中にも、実は私たちがそれに気づかないふりをしている目に見えない規模で動いている何かがあるのではないか。「三度目で最後の大陸」はそんなことを考えさせる短編である。

マサチューセッツ工科大学の図書館の職員として働くこの物語の主人公はインドから、イギリスの大学を卒業後、アメリカへやってきた。外国人としての生活、遠く離れたインドに住む妻、そして大家の女性との関わり方にゆっくりと変化が訪れてくる。それは、生活を送る中で、確実に過ぎていく日々や、時間そのものであり、普段気に留めることもない小さな感覚を拾い上げて文中にちりばめている。

全体を通して主人公が回想する形式で語られており、変わってしまうことや別れ、死は必ずしもネガティブなものではないということ、どんなことがあっても自分が今見ている方向が「前」であること、そして新しい生活はいつしか日常に、日常は気付かないうちに思い出になっていくことも。「三度目で最後の大陸」を読んだ後に自分の日常を振り返ってみると、いつもより少



しだけ特別に思えるはずである。決して繰り返さないはずの生活やそれに伴う時間を、私たちは普段から粗末に扱っているのではないか。そうした日常の大切さに気付かせてくれる作品である。母がこの本を勧めてくれたのは私が中学生の時だった。しかし、当時の私には難解で、読むことなく埋もれてしまっていた。しかし、今、ニューヨーク一人旅を経験した私自身を自己投影しながら、数年越しで読むこの作品に不思議な懐かしさを感じた。素朴で質素な生活やセリフとして文章に現れる言葉だけでなく、何気ない所作に日本人らしさを垣間見ることができるかもしれない。人種や国籍などというものは関係なく、本当に謙虚な姿勢、本来の人があべき理想の姿なのかもしれないと考えた。舞台はアメリカであるが、一般的に我々が抱くような広大なイメージのアメリカは描かれておらず、どこの国にもあるような街の風景を切り取っているのも興味深い点であると考える。それは作者であるジュンパ・ラヒリ自身の経歴がそうさせているのであると考える。私はこの作品内で描かれる老人の頑固さや身勝手さに、年若い自らを弱い存在であると気づいてしまったことを認めたくない事から生じる恐怖や不安の存在、そこで描かれるあっさりと、しかし深く優しい人間関係に、過去は過ぎるだけでなく、積み重なっていくものであると感じさせてくれる。「三度目で最後の大陸」はいつの間にか失くしてしまった気持ちや感覚を思い出させてくれるような、不思議な包容力がある作品である。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 三輪 卓己

「三度目で最後の大陸」は、『停電の夜に』に収められた短編である。アメリカの大学図書館で働くことになったインド人男性の日常生活の中にある、人々との交流や心情の機微を抑制された語調で、しかしながら繊細に描いた作品である。この書評は原書の魅力をこわさずに伝えているだけでなく、その真価を的確に表現し、なおかつ独自の視点による解釈を添えて語ることに成功している。外国人からみたアメリカ、アメリカに慣れない妻とのぎこちない生活、老いと向き合う人の心、確実に過ぎていく時間。それら物語のエッセンスを逃さず捉えながら、評者なりの洞察を加えている。中にはまだ若い学生とは思えぬような深い思慮、巧みな文章表現もみられ、感心させられた。著者であるラヒリと同様の抑制された品のいい文章も見事であった。

#### 入賞者から一言



この度は優秀賞をいただき、大変驚いております。書評を書いたのは今回が初めてで、普段からこれを機会に本を読むことに対しての姿勢を見直そうと考えています。また、私が書いた書評をどこかで誰かが目にし、作品を読むきっかけにしてもらえたらうれしいと思います。この度は本当にありがとうございました。



書名：『西の魔女が死んだ』

著者：梨木香歩

出版社・出版年：新潮社，2001

### 「西の魔女からの教え」

「人は死んだらどうなるの？」

この素朴だが決定的な回答のない疑問は、きっと誰しもが一度は考えたことがあると思う。13歳の少女であるまいも、この疑問を持った者の一人であった。

主人公のまいは、中学校に入って間もなく「上手な人間づきあい」に嫌気がさして学校に足が向かなくなってしまう。そこで母方の祖母の家で休養をとることになり、祖母とのちょっと特別な田舎暮らしが始まる。

「西の魔女」。実はこれはまいの大好きな、英国から英語教師として日本に来て日本人のおじいちゃんと結婚してから日本にいるおばあちゃんのことである。そんな「魔女」との田舎暮らしは、毎日家事やジャムの作り方を教わったり、広い敷地の中で自分のお気に入りの場所を見つけたりしてゆったりとした時間を過ごすものであった。そしてそんな日常の何気ない会話の中で、まいはたくさんの発見をし、また、自分の血筋について聞くことになる。

小さいころから大好きだったおばあちゃんが実は魔女だったという事実を聞き、まいは自分にも魔女の力はあるかと興味を持つ。しかし最初からそんな力が発揮できるわけではなく、努力が必要ということで「西の魔女」指導のもと魔女修行が始まる。魔女になるためには、スポーツ選手が体力トレーニングをするように、精神力を付ける基礎トレーニングが必要。それは早寝早起き・食事をしっかりとる・よく運動する、そして規則正しい生活をする。おばあちゃんはまいにこう伝え、まいは一日の生活表をつくることから実践していく。しかし何事も簡単だと思うことほど難しい。作品中でおばあちゃんはまいに対して様々なことを教えている。生活に必要なことはもちろん物事に対する考え方もだ。その中でも特に私の印象に残ったのが、「一番大切なのは、意志の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力。」「周りの出来事に動揺しないこと。」という言葉である。この言葉は魔女になるため・悪魔を追い払うためという話の中でおばあちゃんが言った言葉だが、私はこの言葉に限らず、魔女になるためという教えの中でおばあちゃんがまいに対して言ったことはすべて、まいがこれから何にも負けずに生きていけるようにということを思い伝えたのではないかと感じ取った。

また、おばあちゃんは何もかもを見透かしているような言動が多くみられる。これがおばあちゃんが魔女だからなのか、それとも年の功故なのかはあまり定かに描かれてはないが、おばあちゃんは、まいに魔女修行という名目で、まいがずっと不安に思い続けていた「死」について、またこれから生きていくうえで大切なことを教えていたのだと思った。

この作品の中で最も重要視されていると考える「死」についてだが、おばあちゃんとまいは

ある約束をする。まいの「死」とは何かという問いに対して、おばあちゃんは「人は身体と魂が合わさってできています。死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になることだと、おばあちゃんは思っています。」と答える。その証拠としておばあちゃんは死んだときにまいにだけわかるように知らせてあげます、と約束をしてくれる。そして物語の最後「西の魔女」が死んだとき、おばあちゃんの家の中のまいの思い出がある場所に「西の魔女」からのメッセージを発見する。おばあちゃんはまいとの約束を守り、最後までまいを安心させる。「おばあちゃん大好き」「アイ・ノウ」という2人の合言葉のようなやり取りが作品中に何度も出てくるが、回数を重ねるごとに大きな安心感に変わるのが読み手にも伝わってくる。

また、この作品の中にはたくさんの植物が出てくる。そして、そのほとんどの植物には、姿かたちの描写だけでなくどの場面で生活に関わっているか、思い出、思い出が描かれている。例えば、ラベンダーはその上でシーツを干しておく日光とラベンダーのにおいがついて気持ちよく眠れるというおばあちゃん流の使用法で登場し、銀龍草と野イチゴは鉱石と野イチゴのジャムが大好きだったおじいちゃんへのおばあちゃんの想いの強さやどれだけ慕っていたかを表すものとして登場し、ミントはまいの心を慰め、落ち着かせ、励まそうとする意志が感じられるミントティーとして何度も登場している。このような植物に関する描写は、季節感を感じさせて本の中の世界がよりリアルに感じられるようになるだけでなく、直接的に癒しを与えてくれる。私はこれらのような植物の描写に魅力を感じた。

おばあちゃんの寛容さと自然に囲まれた生活の描写で、読めば読むほど心が洗われ童心に戻るようで、普段は隠れている素直な自分のまま読める作品であった。忙しく複雑な毎日を送っている方にこの作品をぜひお勧めしたい。

### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 中川 さつき

タイトルの通り、祖母の死を扱った小説ですが、中心となるのは淡々とした日常生活の描写です。世間を驚かす事件やドラマチックな恋愛が巻き起こることもなく、炊事洗濯といった日々の営みが淡々と語られる。こういった作品の魅力を紹介することは非常に難しいものですが、この書評は小説の舞台となる森の空気やシーツの手触り、祖母の側にいる安心感などをさらりと上品に伝えていて、お見事です。しかもおばあちゃんが最後にどうやって約束を果たすのかについては絶妙に伏せてあります。

他者に「この本を読みたい」と思わせたら、その書評は大成功です。今回、私は数多くの書評に目を通しましたが、この作品はすぐに購入して読まずにはられませんでした。小説を読む時間がいかに贅沢なものであるかを教えてくれる名作で、書評の最後にあるように「忙しく複雑な毎日を送っている」教職員の皆さんにもお勧めです。

### 入賞者から一言



どの本でも読むことはできるが、その内容や魅力を自分の言葉で人に伝えるというのは難しいと感じました。今後はもっと本を読み、読んだ後に自分の言葉で文章にまとめるなどアウトプットをして、語彙力をつけて深みのある話ができるような人間になりたいと思います。





佳作

 やまぐち ふみたか  
 山口 文崇


書名：『八甲田山死の彷徨』

著者：新田次郎

出版社・出版年：新潮社，1978

### 「2人のリーダーと軍隊という組織」

人を導く者というのは、往々にして何か優れた能力を持っている。例えば、誰からも慕われるような誠実さであったり、人々に尊敬の念を抱かせるような威厳であったりする。また、自己中心的な傲慢さも一種の能力と言えるだろう。そういった能力を發揮しながら、人を導く者はリーダーと呼ばれ、皆の前に立ち行動を起こすのだ。

日露戦争前の明治三十五年、厳寒の青森、八甲田山にて神田大尉率いる青森第五聯隊と徳島大尉率いる弘前第三十一聯隊が、対ロシア戦に向けての雪中行軍訓練を行った。互いに同じルート<sup>れんたい</sup>を反対側から回り、八甲田山を踏破し冬季における行軍を研究することが主な目的であった。本書ではこの雪中行軍訓練を「人間実験」と評しているが、そのような非常に過酷な状況に挑む二人のリーダーの姿をはっきりとした比較の形で描いている。

この二人のリーダーは、二人ともに軍の中でも優秀な人物であると書かれているが、人としての特性は異なるものであった。平民から出世し、大尉にまで上りつめた神田大尉は、士族や華族によって占められていた軍の中でも珍しい存在であり、平民出の人物としては傑出した存在であった。しかしながら、自らの出自にコンプレックスを抱いており、寒さや雪山に対する危機感を感じていながらも、それを部隊に波及させる事ができなかった。それは、神田大尉の第五聯隊に伴って行軍に参加する、上官の山田少佐の存在が大きかった。非公式に徳島大尉のところへ赴く際も、必ず上官である山田少佐の許可を取るなど、常に神田大尉の行動の中には上官に対しての敬意が潜んでいた。

一方で、士族出身の徳島大尉は、八甲田山という敵に対しての危機感を人一倍感じ取り、対抗策を練った上で、上官に対し自らが行軍に際しての全指揮権を得ることを直訴した。また率いる部隊の構成も、雪国出身者に加え、大柄の人物しか採用しなかった。行軍中にも各人に研究課題を与え、雪山での食料管理の手段や、疲れない歩き方、凍傷の防ぎ方など、良いと判断したものは即座に取り入れた。また道中は案内人を雇い、村々で食料などを補給するなど地元の民の力を仰いだ。そのような柔軟な一面もありながら、案内人に対しての振る舞いが粗暴な描写も見られた。これは、軍隊と市民の格差を表すものであり、徳島大尉の士族出身者としての一面を垣間見るものでもあった。

こうした人としての特性の違いと同じように、雪中行軍訓練の結果も全く正反対のものであった。神田大尉が率いた第五聯隊は199名の死者を出した一方で、徳島大尉が率いた第三十一

聯隊は一人の死者も出さずに帰還した。この結果の違いには、人としての特性の他にも行軍した部隊の組織構造の違いも大きな要因であった。

私が学ぶ経営学では、組織というものはすなわち企業そのものであり、企業の組織構造の違いが、成功と失敗を分けると言っても過言ではない。第五聯隊と第三十一聯隊も経営学での組織論に当てはめると、組織構造の違いを見ることが出来る。

神田大尉の第五聯隊の場合、名目上は神田大尉が指揮官であるものの、実際の指揮は帯同していた山田少佐が行っていた。下に付くものとしては指揮官が複数存在する状態になっていた。一方で、徳島大尉の第三十一聯隊は徳島大尉の直訴の甲斐もあって、指揮権は完全に徳島大尉に一任されていた。

経営学では伝統的な組織論の中で、組織をつくる際の原則を定めている。その中に「命令一元化の原則」というものがある。これは、組織内の指示命令は直接の上位者一人から受けるべきであると定めているもので、他の部署や組織階層の命令は組織を混乱させるとしている。今回の場合、神田大尉の第五聯隊ではこの「命令一元化の原則」に則った組織づくりが出来ていなかった。第五聯隊では神田大尉と山田少佐という二人の指揮官が事実上存在し、結果的に遭難を招いてしまった。それは雪壕を作り夜明けを待とうと判断した神田大尉と、留まることで兵の空腹と凍傷を招く危険から吹雪の中の出発を命じた山田少佐との会話に如実に表れている。

このようにリーダーの人間としての特性と、組織構造の違いによって上手く物事を進められなくなるのは何も軍隊に限った話ではない。大学のゼミやサークルなどの日常のレベルに落としこんでも同じことが言えるだろう。本書は、リーダーと組織の重要性を、実例を持って我々に明示し、現在所属する組織のあり方について問いかけている。

### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 中川 さつき

今年もまた『八甲田山死の彷徨』を題材とした組織論が数多く投稿されました。酒も凍るといふ雪の地獄から全員が生還した第31連隊と、ほぼ全滅となった第5連隊、その明暗を分けたのは一体何だったのか。この書評が光っていた点は、その原因をそれぞれのリーダーの気質だけでなく、彼らの出自の違いから説明しているところです。軍隊という組織のエリートコースを歩んできた堂々たる徳島大尉と、平民出身の叩き上げである神田大尉。後者は卓越した能力を備えているにもかかわらず、ギリギリのところでも上官に遠慮してしまい、結果として組織を脆弱なものにしてしまう。この書評を読んだ後に『八甲田山』を読み直すと、神田大尉がちらりと覗かせるコンプレックスや、それを遠くから気遣う徳島大尉の武士の情けに、胸を突かれます。過去に読んだことのある本の、別の魅力に気づかせてくれるという点で、優れた書評です。

### 入賞者から一言



この度は私の書評を佳作に選んでいただきありがとうございます。

正直入賞の連絡を受けたときは本当に嬉しくて、これから就職活動が始まっていくので、とても良い励みになりました。これを機会に就活の合間にも本を読んでみようと思います。



# 佳作

お ぼ た ち ひ ろ  
小幡 千紘



書名：『恍惚の人』

著者：有吉佐和子

出版社・出版年：新潮社，1982

## 「恍惚の人」

この小説が世に出された1972年、世間にはまだ「認知症」ということばは存在していなかった。今でこそかなり浸透しているが、介護保険制度が整った2000年代に入るまで、その病気は痴呆という表現がなされていた。本書は痴呆、現代でいう認知症を患った茂造と、その家族との介護生活が描かれた昭和の物語である。「介護」と聞けば、どうしても重苦しいテーマに思えてしまう。近年、介護問題は深刻化していく一方だ。老老介護の増加、ヘルパー・介護福祉士の不足。テレビでは、寝たきりの母の世話に疲れ、無抵抗をいいことに息子が殺してしまうといった残虐なニュースが流れる。介護をするということは苦痛であることに他ならない、そんな概念が息づいている。おそらく著者は、日本が抱えたこの現状を既に憶測し、警鐘を鳴らすべく介護を題材に書き留めたのではないかと考えることもできる。

認知症を患ってしまった茂造は、それまでの彼からは予想だにできない行動をとる。実の息子を暴漢と呼び、妻は馬に蹴られて死んだと語る。さらには、怪鳥の鳴き声のようなものを発しながら体操を試みたりもする。そんな老人の相手をさせられる義理の娘・昭子の日常はまさに地獄であった。実父の介護にあまり干渉しまいとする夫・信利と言い合いになることもたびたびあった。息子の敏もそうであるが、血縁関係にあるにも関わらず信利は協力的な態度を見せないのだ。ここで家族のあり方とは何なのだろうかと考えさせられる。信利と敏の姿から分かるように、自分という主体から考えたならば、他者は他者でしかないのである。たとえ血が繋がっていても、何十年にもわたって時間を共有していても、「家族」とは偶然的に形成されたひとつの集団に過ぎないのではという気にさせる。

私が初めて本書を手にとったのは小学6年生のときだった。一通り読み終わって当時の自分に残ったのは、老いることへの恐怖のみであった。年を取って茂造と同じような病気にかかってしまえば、こんなにまで人は変わってしまうのか、という複雑な感情を抱いたことを覚えている。しかし二十歳になった今、再び本書を読んでみると、感想の持ち方ががらりと変わっていることに気がついた。人そのものが変わってしまったわけではない。もの忘れ、幻覚、徘徊。これらは茂造という人間がしているのではなく、すべて病気がさせているのだと感じた。

それを証拠づけるように、不意に茂造の人格が垣間見える場面がある。彼が急性肺炎で病院に運ばれたときのこと。病床で目を覚ましたその時、医者を面前にして、「私は医者は嫌いです。」と言い放った。昭子は呆れ返る。さらに注射をしようとする医者を見て、茂造は続ける。「嫌や



ですよ、昭子さん、注射は。だから医者は嫌いです。」かつての“昭和のへそ曲がり親父・茂造”の姿がそこにはあった。たとえ認知症を患っていようとも、その人の核はその人の中で生き続け、形骸化することはないのである。人格というより、“人核”と表現したほうが正しいのかもしれない。

この作品の世界で、人間は2種類に分かれる。介護する人間と、介護される人間。これを踏まえたうえで、著者・有吉佐和子は次のことを読者に問うている。

——長生きすることは幸せなことか。

現代のメディアでは、長生きの秘訣だとか、ご長寿に訊く生活習慣だとか、いろいろと取り上げられているが、病気を患っている人やその家族にとって、はたして長生きすることは幸せに繋がるのだろうか。介護する人間からすれば、介護される人間が長く生き続けたなら、負担はどんどん増すばかりである。世話する者自身も老いていくわけであるし、老老介護といった問題も出てくる。介護される人間だって、家族や大切な人の存在が認知できなくなり、顔や名前を徐々に思い出せなくなってくる。そんな世界で生き続けて、生きることへの意味を見出すことができるのだろうか。「命長ければ恥多し」という諺があるように、どうも長生きすればいいというものでもないらしい。茂造の奇行を目にした敏だって「いやだなあ。こんなに生きてまで生きたいものかなあ」「パパも、ママも、こんなに長生きしないでね」と呟いている。本書の根源がすべて、この敏のことばに含まれているように思う。とはいえ、自分が家族を介護する当事者になったとき、長生きの是非を自問自答するような余裕が持てるとは思えない。自分の大切な人を目の前にして、一日でも長く生きてほしいと願わずにはいられないのではないだろうか。介護が重労働であろうとも、私の存在が忘れ去られようとも、その人の“人核”は間違いなくそこにあるのだから。視点を主体または客観に変えることで、また答えも違ったものが見えてくる。このうえなく難問である。作者が40年前に投げかけたこの問いに、正しい答えを見つけ出すことはこの先もずっと不可能であり続けるに違いない。

### 選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 山口 亮子

本書評の特筆すべき点は、時を経て2回目の読書であったという点である。小6の時と20歳の今、本書を読んで感想ががらりと変わったということこそ、本というものの価値を再認識する。良書であるがゆえ、いつの時代も読み継がれ、何度も読み続けられているのであろう。また、「介護」が時代を経ても変わらない問題であり、社会の重要な検討事項であることも、評者が最初に挙げている状況から読み取ることができる。そしてもう一つ、自分がどの立場に立って考えたか。評者は最後に介護する当事者となったときの心情を述べているが、これも本書評が評価される点である。おそらく現実に介護者となる年代、あるいは介護される年代に本書を読んでみると、また違った感想を持つことになるであろう。書評とはその時の自分の記録を残すという意味でも貴重なものである。次にはどのような書評を書けるようになっているであろうか。

### 入賞者から一言



この度はこのような賞をいただけて、大変嬉しく思います。今回、書評に挑戦するにあたり「書を評す」ことの難しさを痛感いたしました。同時に、文学の奥深さを再認識することもできました。

今後も多くの本に触れていけたらと思います。ありがとうございました。



# 佳作

てはら ひろか  
手原 啓花



書名：『かっこうの親もずの子ども』

著者： 柳月美智子

出版社・出版年： 実業之日本社，2012

## 「『かっこうの親もずの子ども』を読んで」

“家族の物語”は不思議と人の心を引き寄せるものだ。それは、誰もが家族に対して何かしらの思いを抱いているからだだろう。本書は「子育ての今、子育てのすべてを描き切った家族小説」であり、とりわけ親子の姿を丁寧に描いた温かな作品である。

物語の主人公は、子ども向け雑誌の編集者でありながら、4歳になる一人息子の智康を育てているシングルマザーの統子。統子は仕事と子育てに追われながら、日々慌ただしく暮らしている。冒頭の部分からその大変さがしみじみと伝わってくる。……子どもが熱を出したのに、そばにいてあげられない。仕事が終わって急いで帰ったら、一緒にいられなかった時間を埋めるように質問攻めをしてしまう。このように、物語の前半は仕事と子育ての両立に苦しむ統子の姿がリアルに描かれている。しかし、この物語はシングルマザーである統子の苦労ばかりが全面に押し出されている訳ではなく、心がほっこりするシーンもたくさんある。それは、統子と智くんのささいな会話だ。作者自身が母親だからだろうか、統子と智くんのやりとりは優しく表現されていた。読んでみると、温かくて幸せな気持ちになるような微笑ましい会話たち。とくに、まだ4歳の智くんが話す言葉の数々は、あどけなくて可愛いものが多い。そうかと思えば、憎たらしく感じる言葉もあって笑ってしまう。そんな親子の姿を見ていると、まるで親子のそばでそっと見守る祖父や祖母のように自然と微笑んでしまうのである。

本書では親子の姿とともに親の気持ちも丁寧に描かれている。そして、智康を思う統子の姿に“親”とは……と考えさせられる。わたし自身はまだ学生で“子ども”の立場しか分からないが、自身が考える“親”の理想像というものがある。それはきっと、家族を持ちたいと思っている人なら誰もが考えることだろう。将来どんな親になりたいか、どんな家庭を築きたいかという家族像。本書が取り上げられていた雑誌の編集部寸評では、「親になる人生と親にならない人生は、天と地ほどにも違う。」と書かれていた。この言葉の意味は本書を読めば分かる。わたし自身も強く頷けた。親になることで得られるものは奇跡みたいなものだと、わたしは本書を読んで感じたからだ。本書を読むと、親になることの苦労や痛みをほんの少しだが感じる事ができ、親の気持ちに寄り添うことができる。そして、将来の自分の姿に思いをはせることができるのだ。

話を本書の内容に戻そう。わたしははじめ、この物語は単なる家族小説だと思っていた。しかし、本書を読み進めていくうちに、これは家族小説というだけでなく命の物語でもあるのではないかと感じた。なぜかという、本書は生殖補助医療を取り上げ、それを軸として物語を展開さ

せていたからである。生殖補助医療というワードに対して、人それぞれイメージするものがあると思うが、わたしは生殖補助医療に対して“自然な生の営みと比べて人工的な生の営み”というイメージを持っている。だから、それを物語に絡めている本書は人の誕生や命についての物語でもあると考えたのだ。

物語の中で、智康はAID(「非配偶者間人工授精」)のことで、「夫以外の精子で妻に人工授精を行うこと」)で生まれた子どもだという事実があり、統子がこの事実を将来智康に伝えることに思い悩み、また精子提供者にまつわることで振り回されていく姿が描かれている。統子が不安を抱え思い<sup>あぐ</sup>倦ねる姿に、“命”とは……、“愛”とは……と考えさせられる。それが、本書の魅力でもあるだろう。そして、この難しい問いかけに答えるためのヒントが物語の後半に用意されている。それは、統子が振り回されたあとに気づくある確信だ。それは「遺伝上の父親が誰だろうと、智康に対する愛情はなんら変わらない」ということ。命がどのような形で生まれたとしても、それを愛し大切に思う気持ち、本書では、「まずは智康の健康を祈り、それから智康のために自分の健康を願った」統子のその祈りが愛であるとわたしは思ったのだ。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 山上 浩志

『かっこうの親 もずの子ども』という書名から、どのような内容の本であるかは想像もつかない。講評のために、大学時代でもほとんど読まない“数式のない小説”を読んだ。確かに、書評で書かれているように、冒頭部分は口語文で書かれた“シングルマザーの子育て日記”のようだ。しかし、この本で訴えたいことが読み進むと後で分かる。「非配偶者間人工授精」で生まれた子どもと、それによってシングルマザーとなった母の葛藤にある。読者の年齢、環境や経歴によっては感じ方や批評は異なるのではないかと思う。さらに、同じ読者でも親になった場合でも変わるだろう。書評は著者の真意をつかみ、本で訴えたいことを公平にわかりやすく論評していることがよい点であると思う。多分、私はこの書評がなかったら、冒頭部分で読み進めることはなかっただろう。書名から興味の湧かない本でも手にとってみようかと思える魅力と構成力を感じられた書評である。

#### 入賞者から一言



この度はご選出いただきありがとうございます。

まさか選出していただけるとは思わなかったので、嬉しさよりも驚きのほうが大きいです。拙い文章ですので本の魅力が伝わるかどうか不安ですが、この書評を読んで『かっこうの親 もずの子ども』を手にとっていただけたら嬉しいです。





# 佳作

しまだ あやか  
島田 紋佳



書名：『離婚毒：片親疎外という児童虐待』

著者：リチャード A. ウォーシャック著；青木聡訳

出版社・出版年：誠信書房，2012

## 「片親疎外という児童虐待」

「愛する者から愛してもらえないということを、教えてやるよ。」

これは本書の中で離婚した夫が、元妻に向けて放った言葉である。ここでいう「愛する者」とは、自分の子どものことであり、元夫は子どもを「離婚毒」に感染させようとしている。子どもに元妻を拒絶させ、子どもから元妻を遠ざけるためだ。一度は愛した相手なのに気持ちがなくなった途端、愛情は憎悪に切り替わる。ひどい話である。

本書の舞台はアメリカである。同居親が子どもに対して「悪口、罵詈雑言、洗脳」を行い、別居親のイメージを悪くし、拒絶させることを「離婚毒」と表現している。親の離婚によって同居親が子どもを「離婚毒」に感染させた場合に、別居親が疎外されないために、また、疎外された場合の対処の仕方が書かれている。この問題が起こったときに、欠陥のある親、たとえばドメスティック・バイオレンスを行ったものに対する正当な拒絶と不合理な片親疎外を区別しなければならない。「片親疎外」自体は「離婚毒」ではないからである。もともと、子どもは両親双方から愛されることを願っており、両親に対して「嫌われたくない」と思っているので親の意思には寛大である。

子どもが別居親との交流を拒絶することも、別居親に対して関心を示さないのも、「離婚毒」に感染しているからである。子どもは同居親の気持ちを気遣い、また自分の身を守るために別居親に対して冷たくする。「会いたくない。嫌い。」と別居親に対して嘘を言う。一緒にいる時間が多い同居親を気遣うのは自然なことである。同居親はそうしてわが子をコントロールすることで自己欲求と元配偶者を疎外したいという気持ちを満たしている。また、「離婚毒」の一番の問題は同居親が「相手を傷つけてやりたい」と思い、理性的になれていないことである。それは親同士の問題であり、子どもをまきこみ、わざとでも、無意識にでも「離婚毒」を投与するべきではない。親は子どものことを考える場合、元配偶者に対して自制を働かせて接することが大切である。両親間の問題は子どもに知らせるべきではない。

この本は「子どもの幸せ」に焦点があると考えられる。なぜなら、離婚後の親同士の確執ではなく「子どもの気持ちを無視しない」ということが最重要だと考えられているからだ。多くの親は離婚時に子どもを顧みず、自分自身の苦悩を優先的に対処してしまう。離婚毒は子どもの自己肯定感の低下、他者依存を増幅させてしまう。子どもは同居親を守るために嘘をつくことがある。「親の離婚の被害者はいつだって子どもである」という考えが一般的だ。米国では30年

前から離婚時の子の監護権や面会交流に対する取り組みがなされていたのに対し、日本は2012年に法改正がなされたばかりである。アメリカが共同親権であることに対して、日本は単独親権である。よって、余計に別居親との親子関係が希薄になり、片親疎外が起りやすい。子どもと別居親との関係が良好だった場合、子どもは別居親にも会いたいと思うはずである。日本でもそういった子どもたちに、両親が離婚しても確執なく会うことができ、「この両親のもとに生まれてよかった」と思える環境作りをしていくべきである。子どもは親の離婚をどうすることもできず、親の決定に従うしかない。一番の被害者なのだ。片親疎外から子どもを助けるためには両親の対立を少しでも減らすこと、子どもの立場に立つこと、決して子どもの前で片方の親の悪口に巻き込まないことが重要である。片親疎外の問題解決は待っていても解決しない。働きかけること、子どもとの関係修復を諦めないことが重要なのである。

もし自分が結婚してから、と考えても片親疎外という問題は直面しないとは言い難い問題である。自分が「愛する人」から疎外されないために、将来の子どもが「愛は信頼できない」と思わないために、自分が「離婚毒」を投与する加害者にならないためにも、離婚後も親子はもちろん、親同士も、より良い関係を築くことが大切である。その子にとっての親はただ二人だけなのだから。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 山口亮子

「離婚毒」や「片親疎外」という言葉は耳慣れない。本書は翻訳であるが、アメリカでもこれは新しい言葉のようである。本書評が示しているような両親の離婚の狭間で子どもが苦しむ状況は従来からあったことであろうが、何が原因でどのように起きるのかということは、このような新しい言葉を生み出すことにより説明される必要がある。セクハラもドメスティック・バイオレンスも、それが近年言葉を与えられたことで、被害者が自覚し声をあげられるようになり、その防止や法制度が進んでいったのである。評者は日本との比較も検討しており、本書をまとめながら両国の制度の違いや本書の主張をよく表している。外国の本を読むということは、自然と自国や自分のことを考えることとなる。しかしもう一步、このような問題を自らへの警告としてとらえるのではなく、社会的な課題として考えてこそ、読書が学問的考察に近づくのではなかろうか。

#### 入賞者から一言



今回私の作品を佳作に選出していただき、ありがとうございます。

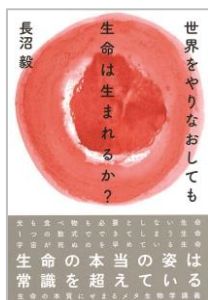
受賞したことを聞き、驚きのほうが大きかったですがとても嬉しかったです。

これからも色々な本を読んで自分の意見を持ち、理解力を深めたいと思います。



# 佳作

すずき あんな  
鈴木 杏那



書名：『世界をやりなおしても生命は  
生まれるか?』

著者：長沼毅

出版社・出版年：朝日出版社，2011

## 「生命について考えて自分を知る」

「生命とは何か」この人類史上究極の問いについてのセッションをまとめたのが本書である。本書は、広島大学の生物圏科学研究科の長沼毅氏が広島大学附属福山中・高等学校の生徒10名と行ったセッションを書き起こしたものである。ゆえに、科学者の考え方はもちろん、セッションのライブ感を追体験できる構成になっている。長沼氏の興味をそそるテーマ設定はもちろんのこと、高校生の質問もセンセーショナルで着眼点がおもしろい。

「生命とは何か」これは難しい問題であるので、長沼氏はこれを「『生命とは何か』とは何か」という二重構造の問いに変形する。このような問いは「メタな問い」と呼ばれ、このような形にすることで、その問題の本質を見ることがつながるといえる。メタに考えることで面白い視点を発見できるらしい。このメタな問いを手始めに、「人間とは何か」という問題を提起し、そこから世界の果てに住む生物に焦点を当てていく。砂漠、深海、さらには宇宙までにも話は広がっていく。その中で長沼氏は地球外生命の可能性をほのめかしている。

生命のカタチを自由に考えるというセッションでは「みなさんの頭をグラグラと揺さぶってみたい。」と長沼氏が前置きすることば通り、私の頭の中での常識が崩れていくのが分かった。長沼氏は漫画『ONE PIECE』に出てくる「悪魔の実」や映画「ターミネーター」の変身シーンなどを例にとり、理想の生き物や生き方について問う。生徒たちからは「僕は未来史が知りたいって思います。」や「怪我をしても一瞬で治せるような体を作りたい。」といった機知に富んだアイデアが生まれる。そして、長沼氏はそれについて科学的に検証してくれる。セッションであるから、「火炎放射をしたい。」という生徒の発言から「時間は逆転できない。」という結論に至るなど、話が少し横道にそれるのも本書の醍醐味であると思う。

そして、長沼氏は生命を数式で表すことを試みる。生命という有機的なものを無機的な数式で表そうという試みに私は度肝を抜かれた。L-システムを採用することにより、細胞の並び方を説明できる。また、ウサギの子供の増え方はフィボナッチ数列で表せる。この辺りは本を読むだけではわかりにくいから、ぜひペンと紙を用意して自ら手を動かしながら読み進めてほしい。さらに、長沼氏は「動く油滴」について話を進める。「動く油滴」は生物っぽい。油滴が生物だなんて信じられないし、信じたくないような気もする。しかし、この油滴が成長したり、はたまた死んでしまったりしたらますます生物っぽい。この条件を調べるには、複雑で膨大な計算をするスーパーコンピューターが必要になるが、長沼氏は「それを計算ではなく実際にや



ってみているのが宇宙だ」という大胆な考え方を提示しているのもまたおもしろい。

ここから、生命の話は宇宙スケールへとぐんと広がっていく。宇宙空間の温度が一定になってしまう状態を宇宙の「熱的死」と呼ぶ。何℃でも構わないがどこまで行っても同じ温度であり、宇宙の死とも考えられる。そこに向かって宇宙は突き進んでいるのだが、それに加担しているのが生命であるという。生命は散逸構造であり、散逸構造というのは熱をどんどん捨てる仕組みを持つらしい。そして、この宇宙にはエントロピー増大原理が成り立っている。これは、理由は分からないが宇宙は乱雑さが増し、無秩序になって平らになっていくというものである。ここで散逸構造とははっきりとした「秩序」であるが、これが熱を捨てることで「乱雑さ」は増していく。このように、散逸構造は小（散逸構造という秩序）を捨てて、大（エントロピー増大）を得る構造と言える。では、我々生命は宇宙を死に近づけるためだけの存在なのだろうか。そもそも、我々が存在する意味などあるのだろうか。この辺りは、長沼氏と生徒たちとの間で議論がなされているので、わくわくしながら読んでほしい。

最後に、長沼氏は科学哲学者カール・ポパーの言葉を贈っている。「生命とは問題を解くことである。そして、この宇宙で唯一、問題を解くことのできる複雑なものが生物である」なんだかトートロジーのような気もするが、本書を読んだ後だとなんとなく分かる気もする。そして、もう一度読み返してみるかと思える、本書はそんな一冊だと思う。

**選考委員による講評**

**選考委員代表 理学部教員 山上浩志**

『世界をやりなおしても生命は生まれるか?』は魅惑な書名である。講評のために渡された本をまず斜め読みしてみた。小説とは異なり、物理の理論式や概念が本に書かれてあり、まさに理系の本だと感じた。書評では「生命とは何か」というキーワードを提示している。この問いに対する著者の論点や手法は多種多様であり、正直に言って1つ1つの説明がどこまで正しいかは私には判断が付かない。エントロピー増大、まさに「乱雑さ」が増している。しかしながら、書評では“話が少し横道にそれる”や“大胆な考え方”と表現しているように、自然科学の論理的な厳密な解釈というよりも、発想の面白さを強調している。専門用語が多用しているが、理系の本とは思わず読み物として割り切れば、どの分野の方でも楽しめる本である。書評において十分に論評できていると思う。また、発散した内容であるにもかかわらず、わかりやすい表現と構成力には感心する点が沢山あった。

**入賞者から一言**



朝起きて寝ぼけまなこでメールを見たところ、「おめでとうございます」「図書館」の字が目に入り、よく理解せぬままにも「やったー」と飛び起きました。

書評を書くには、その本をよく読み込んで自分なりの解釈を持つことが必要です。この作業は案外大変で、途中で解釈の論点が分からなくなることもありました。しかし、書評を書き上げたあとの感慨深さはひとしお!みなさんも来年はこの達成感を味わってみませんか?

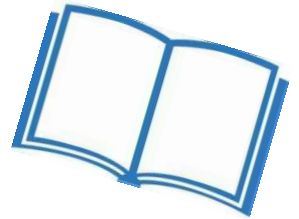


## 第9回 京都産業大学図書館書評大賞アンケートから

書評の応募時にアンケートの回答にご協力いただきました。ありがとうございました。その一部をご紹介します。

### Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ゼミ等の課題・教員からの推薦。
- ポスターや掲示物をみたから。
- 書評大賞に興味があったから。
- 本が好きで、お薦めしたい本があったから。
- 文章力 up のため。
- なにごとにも挑戦する精神は重要だと感じたから。
- 夏休みの思い出として。



### Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- |              |     |
|--------------|-----|
| ➢ 話題の本だから    | 3人  |
| ➢ 先生からの推薦・指示 | 56人 |
| ➢ 図書館で見つけたから | 11人 |
| ➢ 好きな作家だから   | 14人 |
| ➢ 興味のある分野だから | 47人 |
| ➢ その他        | 4人  |

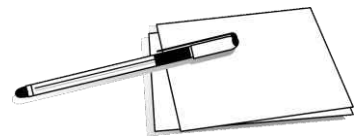
### Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

#### 「はい。」(82人)(理由)

- 心にくる本、好きな本を多くの人に紹介したいから。
- 書評を書くことに興味があって、楽しいから。
- 文章力・構文力を高めることにつながるから。
- 作品に対して理解をより深められるから。
- 読後の感想等を多くの人と共有する良い機会だから。
- じっくり読書するきっかけとなるから。
- 自分の文章を評価してもらえる機会があまりないから。

#### 「いいえ。」(44人)(理由)

- 文章を書くことは難しいし、時間が無いから。
- 本を読むことが苦手だから。
- 卒業するから。



### Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

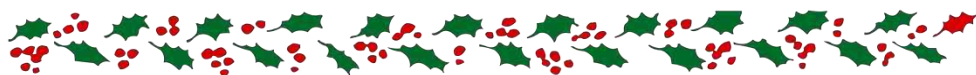
- 書くことは難しいが、著者の考えを自分の言葉で消化することにもなり、文章力を向上するきっかけにもなった。
- 書くことは難しかったが、繰り返し本を読み、理解を深めることができた。
- 感じたことを限られた文字数で表現するのは難しかった。
- 大学院生にも応募できるようにしてほしい。
- 書評を書くのに時間がかかったが、達成感があった。
- 普段本を読まないのに、本を読む良いきっかけとなった。
- 本は先人の物事への考え方が書かれており、自分の視野を広げるきっかけになった。
- Webでの提出方法について、複雑であり、入力内容もわかりづらかった。携帯やスマホなど身近な機器でも提出できるようにしてほしい。

### Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 純文学作家の方の講演が聴きたい。
- 本の読み方について専門家の講演が聴きたい。

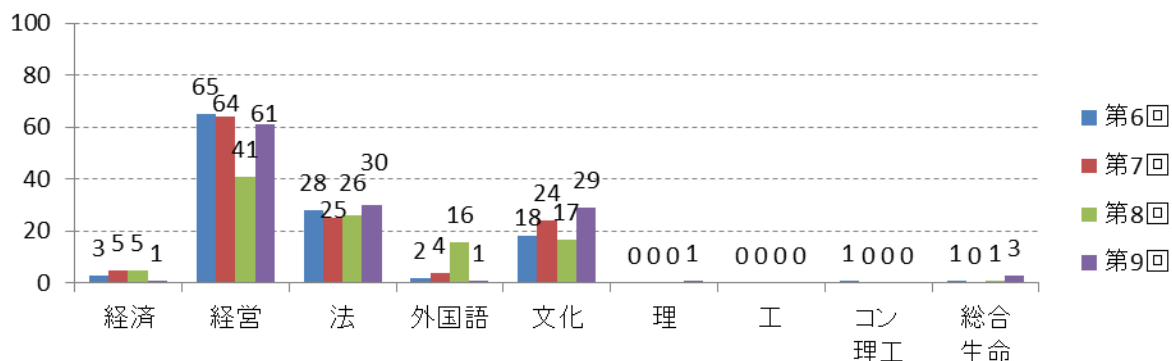
#### -希望する講演会講師-

あさのあつこ・朝井リョウ・百田尚樹・金美齢・竹田恒泰・秋元康・伊坂幸太郎・綿矢りさ・田中慎弥・恩田陸・池上彰・安富歩・森見登美彦

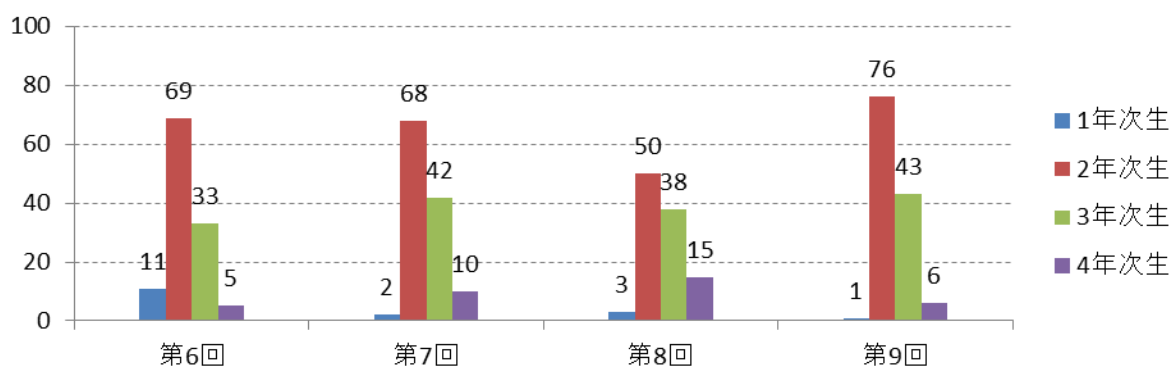


# 第9回 京都産業大学図書館書評大賞 統計

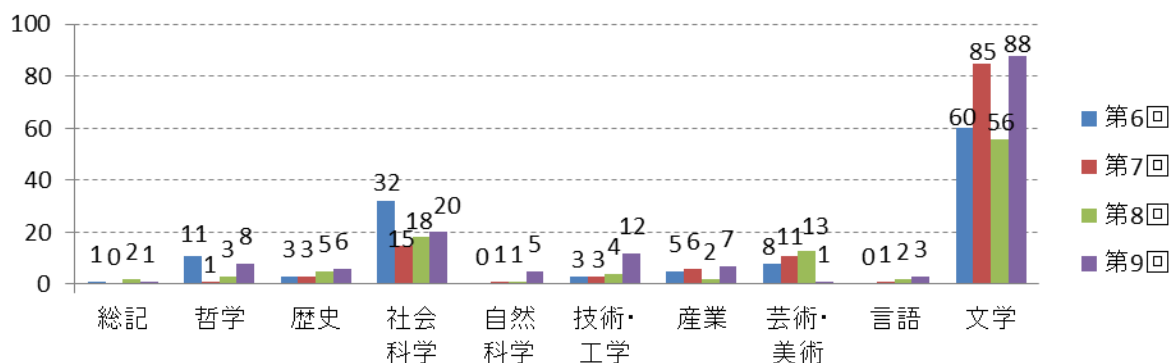
## 学部別応募者数



## 学年別応募者数



## 対象図書分野別冊数



「学部別応募者数」は、経営・法・文化学部といった文系学部の順に多く、これらの学部は前回と比べて増加しています。他方、文系学部でも経済・外国語学部の応募者数は減少する中、理・総合生命科学部は前回から微増しました。しかし、文系学部の学生の応募が多く、逆に理系学部の学生の応募が少ない傾向が続いています。書評大賞は決して文系学部生向けのコンテストではありません。実際に、今回は入賞者9名のうち、理系学部生3名の入賞となりました。応募可能な対象図書は図書館で所蔵している資料で、分野の限定はありませんので、理系学部生もぜひとも応募してください。「学年別応募者」は、こちらも前回と同様に、2・3年次生の応募が多くなっています。1年次生の応募が極めて少ないため、今後の応募を期待します。「対象図書分野別冊数」は、こちらも前回と同様に、文学が圧倒的に多くなっています。日頃読み慣れている小説の書評を書きたいという気持ちの表れかと思えます。また、哲学、自然科学、技術・工学、産業といった文学以外の応募も若干増加しています。今後も自分の専攻分野に関する本の書評も期待しています。



## 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

## 応募要領（抜粋）

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
  - (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
  - (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。原稿はマイクロソフト社の Word を使用して作成すること。
  - (3) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること。（盗用厳禁）
  - (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし入賞は 1 人 1 篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

## 応募実数

126 名 151 篇

## 実施日程

応募期間 平成 25 年 7 月 1 日（月）～ 9 月 18 日（水）

入選発表 平成 25 年 11 月 29 日（金）

表彰式 平成 25 年 12 月 18 日（水）

## 選考委員より 一言



受賞作をはじめ、書評大賞に応募してくれた学生諸君の力量に感心し、頼もしく思えました。その一方で大学生の言語に関わる能力や論理的思考能力の低下が問題視されてもいます。皆さんの一層の努力を期待しています。（三輪）

ゼミの先生に読んでもらい、推敲を重ねて投稿された作品と、そうでない作品とでは完成度が違いました。身近な誰かに読んでもらうだけで、入賞の可能性は格段に上がります。友人・家族・教員を積極的に活用しましょう！（中川）

この本のお勧め、こういう人に読んでほしい、というような紹介する表現が目立ちました。また書評は感想文とも違います。ではどういうものが書評か。ハウツー本で教わるのではなく、やはり良い書評を読んで学び何度も自分で書いていくしかありません。（山口）

高校の国語の試験で赤点を取ったことのある文系バカの私が選考委員をするはめになった。理系の論文に比べて基準が曖昧であり、苦痛な作業であった。しかし、訴える強さは客観的に判断できたのではないかと思う。（山上）

書評自体は良い作品が多くありました。しかし、気になったのが漢字変換の誤りと文法上の間違いです。書評が完成したら、しばらく置いておき他人の作品として読んで下さい。批判的な眼で見るので必ず修正点が見つかります。（岡田）

応募作品を読むと、久しぶりに本が読みたいくなります。読んだことのある図書は、こんな見方もあるんだなあ、ああそうそう、そうだったと、旧友に会うような感じです。来年もさらなる力作を期待しています。（真部）

本を読んであれこれ考えて、たくさん書いて、削ったり言い換えたりして書評を完成させると、きっと達成感を得られます。考えも整理されます。考えを形にするのが楽しくなります。書評が宝になります。お試しください。（近江）

入賞作品は、どれも本当によく考えて書かれているなど感心させられました。また、入賞は逃したものの読み応えのある作品も数多くありました。入賞することは一つの目標ですが、これを機に少しでも本に親しんでもらえたらと思います。自分の好きな本でいいですよ、好きな本で。（鈴木）

人に自分の思いを伝えるためには、読んで知り得たことをただ書き連ねるだけでなく、しっかり理解し自分の中で消化すること。そして経験や知識を織り交ぜて自分の言葉で表現することが大切ですね。（今井）

今回初めて書評大賞選考委員を務めさせていただきました。本を深く読み込み自分の言葉で巧みに表現した応募者もいれば、本を深く読み込めなかった応募者に分かれていたと思います。知識を深めるために、本を深く読む習慣を大学生の内に養いましょう。（山本）